

げんでん 福井 ふれあい

2008 SUMMER 第31号

第60回全国植樹祭2009ふくい
平成21年春季開催

戦国大名「朝倉氏の歴史と文化(一)」

ふるさと福井 人物シリーズ 「橋本左内(上)」





第60回

未来へつなごう 元気な森 元気なふるさと 全国植樹祭 2009ふくい

平成二十一年 春季開催

はじめに

第六十回全国植樹祭が、平成二十一年春に福井県で開催されることが決定しました。

福井県内の文化の振興とふれあいと

ゆとりある地域づくりをめざして活動している

当財団は、この全国植樹祭が立派に開催され、ここで培われた県

民運動がその後も大きく

展開することを願っています。

そこで、福井県農林水産部農産材活用課、



前回大会(昭和37年丸岡町女形谷)でのお手植えの様子

全国植樹祭室を訪れ概要をお聞きしました。

全国植樹祭とは

全国植樹祭は、森林・緑に対する国民的理解を深めるため、毎年春季に、天皇皇后両陛下ご臨席のもと行われる国土緑化運動の中心となる全国行事です。

福井県での開催は、昭和三十三年の丸岡町(坂井市)

女形谷での第十二回大会以来、四十七年ぶり二回目となり、「六十回」という節目の大会にあたります。

開催当日は、両陛下のお

手植えなど、記念式典や、県内外の参加者による記念植樹などが行われます。

手植え・お手植えなどの記念式典や、県内外の参加者による記念植樹などが行われます。

FRONT COVER

福井県指定

無形民俗文化財

「花山行事」

(福井市)



新緑鮮やかな五月五日(子供の日)に福井市橋本町に伝わる「花山行事」が、子供達の健やかな成長と五穀豊穡、火災鎮護を願い、同地区の登知、為神社に奉納されました。

子供達は、白、赤、ピンクのツツジなど春の花を束ねて竹の先にくくりつけた「花山」を持ち、その日の法被と鉢巻姿で正午に登知、為神社に集合。

神事の後、花笠をかぶり太刀に似せた竹の棒を腰に差した前役を先頭に「花山」をかついだ子供達が「はなやま、ごんげん」と元気いっぱい掛け声を響かせ町内を約一時間かけて練り歩き神社に戻りました。

(関連記事(10頁)ふくいの伝統行事シリーズ)



式典会場イメージ図(一乗谷朝倉氏遺跡)

の感謝の気持ちを表現する演出を行う予定になっています。

また、一人でも多くの方に植樹祭に参加していただくために、坂井市・大野市・越前町・若狭町の県内四力所に地域会場を設け、記念植樹のほか木工教室などの実施を計画しています。

詳しくは、福井県農林水産部農産材活用課・全国植樹祭室へお尋ねください。

式典会場イメージ図(一乗谷朝倉氏遺跡)

式典会場イメージ図(一乗谷朝倉氏遺跡)



エコ・グリーンツーリズム



林道ウォーク

ふるさとの自然をいつまでも大切に
していくために、近くの山や森に
入ってみたり、林道ウォークなどの自
然体験会に参加して、私たちの身近
にある自然の素晴らしさを知ること
から始めてみましょう。

「健康長寿ふくい」の
自然を知り、伝えよう

みんなで 県民運動に 取り組みましょう！

全国植樹祭を一過性のイベントとして終わらせず、
福井の「元気な森 元気なふるさと」を未来へ引
き継いでいくため、三つの県民運動を永続的に進
めていくことになっています。
県民の皆様、身近なところでこの県民運動に参加
しましょう。

元気な森をつくろう



親子木工教室

森は、
CO₂の吸
収や災害の
防止など多
様な役割を
果たしてい
ます。森づ
くり活動に
参加したり、
県産材を使
うことで、「木
を植え、木を
育て、木を使
う」という森
の循環を活
性化させ、元
気な森をつ
くみましょう。



森づくり活動

花と緑にあふれるふるさとをつくろう



県産材のプランターカバー

花は、私
たちの心
を潤し、
生活に豊
かさを
もたら
してく
れます。
地域で
行われ
る花の
栽培活
動に参
加したり、
家庭で、
玄関や
ベランダ
に花を
飾り、美
しく誇
りの持
てるま
ちをつ
くりま
しょう。



クリーンアップ&フラワー大作戦

記念式典 & 記念植樹



西川知事による「エドヒガン」の植樹



間伐材から作ったアルプホルン



緑の少年団による苗木交換会

開催テーマ「緑と花と
やさしい心」のもと、盛
大に開催されたフレ大会
祭。記念式典では、造
林コンクール入賞者の表
彰や来年度の全国植樹
祭にむけた苗木交換（敦
賀市黒河小学校・福井
市一栗小学校）が行われ
たほか、記念イベントと
して玉川アルプホルンク
ラブによる演奏会・講演
会が行われました。
また、会場内の全国植
樹祭コーナーでは、シン
ボルキャラクター「ふっ
くりん」の定じゃんけん
大会や花壇アドバイザー
による花の寄せ植え講座
、木製プランターカバー
づくり体験などを開催し
ました。会場に集まった
約三千人が、来年度の
全国植樹祭に向けて大
いに盛り上がりました。

全国植樹祭PRコーナー



花壇アドバイザーによる花の寄せ植え講座



木製プランターカバーづくり体験



第六十回全国植樹祭のフレ大会とし
て、第五十回福井県緑化大会in敦賀が
平成二十年五月十八日（日）、敦賀市総
合運動公園をメイン会場に行われまし
た。
晴天のさわやかな新緑のもと、「森」
と「水」と「木」に触れ体感することで、
多様な健全な森林を未来に引き継いで
いく意識の醸成を図り「元気な森づく
り」を行おうと県内各地から多くの県
民の方々が参加されました。当日の様
子をご紹介します。

第50回福井県緑化大会in敦賀開催

朝倉氏の歴史と文化(一)

朝倉氏の歴史

文:青木豊昭

筆者プロフィール



青木 豊昭氏
Toyoaki Aoki

1944年、福井県生まれ。福井大学教育学部卒業。福井県立博物館学芸課長、福井県教育庁生涯文化財調査センター次長、同所長。福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館館長を経て現在、同館特別顧問。著書『越前若狭地域歴史の謎に挑む』(2006.8.1刊)。共著『日本城郭大系11』『戦国天皇の謎に挑む』『福井県史通史編一 原始・古代』『鯖江市史通史編上』『前方後円墳集成中巻編』『戦国大王と越前』『福井県不忠諸事典』他。

一 はじめに

戦国大名朝倉氏は五代、一〇三年にわたって大國越前を支配し、覇権を周囲の国々に及ぼし、豊かな繁栄と高い文化を築き上げた。

この朝倉氏の本拠地が福井市にある一乗谷朝倉氏遺跡である。遺跡は昭和四十二年から発掘調査や環境整備が進められ、現在、四十二年目を迎えている。

その結果、遺跡は二七八ヘクタールと広大で国指定の特別史跡に、庭園は四ヶ所が一乗谷朝倉氏遺跡庭園として国指定の特別名勝に、さらに遺跡出土遺物二千数百点が国指定の重要文化財となっている。正に、実像の見える戦国城下町遺跡として、日本遺産といっても過言ではない。

来春、ここをメイン会場として第六十回全国植樹祭が開催され、遺跡を全国に広く紹介する大きな好機が与えられることになっている。

そこで、それまでに一人でも多くの方々に朝倉氏の歴史や文化、それに遺跡について知っていただくことを思う。

まずは朝倉氏の興亡の歴史について

二 朝倉氏の歴史

てである。

(1) 越前入国と雄伏期(広景・家景)

越前朝倉氏の祖は広景で、南北朝争乱時、延元二年(一三三七)、斯波高経の重臣として但馬国から入国し、北朝方として活躍した。その後、黒丸(福井市黒丸町)に館を構えた。



朝倉氏は但馬国では古くからの豪族で、鎌倉時代には有力御家人であった。しかし、南北朝期には名字の地であり、本領であった朝倉氏は幕府中枢の有力御家人長井氏のものとなり、朝倉氏は長井氏と臣従関係にあった。一方、斯波高経の母は長井氏の出身であった。このような関係から朝倉氏は斯波氏の被官となり越前に入国したと考えられている。

その子正景(高景)は京都の東寺南大門の合戦などで武功を上げ、足利氏預所職や足利高氏(尊氏)から「高」の字を賜った。その後も手柄を立て、貞治五年(一三六六)、越前国七ヶ所(手坂庄・桑庄・東郷庄・坂南本郷・河南下郷・木部島・中野郷)の地頭職を得た。さらに、越前各地の荘園を侵略し、その経済基盤は安定した。

これを機に黒丸から一乗谷へ本拠を移したらしい。高景の子、孫次郎(氏景)は摂州中島で勝利し、将軍から「大功勝勲」と称えられ、一字を賜り氏景と名乗り、一乗(谷)に熊野三社を勧請した。さらに、その他の子や孫が「阿波賀」「三段崎」「東郷」「中島」などと一乗谷やその近くの地名を名字とすることからも一

乗谷への移動は納得できる。

氏景のあと、貞景・教景・家景と代を重ねるが、教景が鎌倉公方足利持氏討伐軍や、結城の乱に派兵したのが特筆される。

これら広景から家景まで六代の活躍は守護斯波氏の被官としてであった。

(2) 戦国大名となった創生期(孝景・氏景)

孝景の代になると国内では守護の斯波氏と守護代甲斐氏の争いが激化し、その勢力は一進一退を繰り返した。

東軍と西軍に分かれて応仁の乱(一四六七〜一四七七)が京都で始まると孝景は西軍に属し華々しく活躍し注目される存在となった。

東軍方の武田勢を襲い八十ばかり討ち取り、その打ち首二十四を並べて酒を飲んだとか、斯波勢の陣を急襲し、兵を一人も損せず脱いであった甲五十ばかりを奪ったとか記録にある。



朝倉孝景肖像(心月寺蔵)
重要文化財

そこで、東軍方は孝景に還返って東軍方に属すれば越前国の守護職に補任するとの將軍の御内書を出し、孝景を東軍に誘い込んだ。

越前の戦国大名となった孝景は越前平定に乗り出し、合戦に合戦を重ね敵対勢力を国外に追放した。その後も度々、斯波・甲斐・二宮等の反朝倉勢力は加賀の一向一揆勢などと組んで乱入したが悉く国外に追放した。

その子氏景の代は五年と短かったが、一乗大焼亡の記録があり、それによれば当主館や朝倉城は無事であったが重臣たちが焼死したとある。当時既にかなりの城下町の形成がうかがえる。

(3) 国難を克服し安定期（貞景）

氏景の子貞景は二つの国難を克服し安定期へと導いた。

一つは越前を追放された斯波氏と朝倉氏との間で越前の支配権をめぐる相續が長享元年（一四八七）に起きたが、將軍の上意として落着いた。その四年後、再び問題化するがこれも朝倉方の懸命な努力によって収まった。

もう一つは文龜三年（一五〇三）、敦賀郡司の朝倉景勝が有力な一族と謀叛を起こしたが、内通により未然に防いだ。

最後の一つは永正三年（一五〇六）、加賀・越中・能登の一向一揆勢の大軍が九頭竜川北岸まで侵入したが、朝倉勢はこれを大破し撃退した。

この間、近江・京都・美濃に出陣した。

特筆すべきは、貞景は宮廷給所預りで幕府の御用絵師でもあった土佐光信に洛中の屏風絵を描かせたが、たいへ

ん珍重な興味深いものであったと伝える。貞景はこれを手本に一乗谷の城下町の建設に励んだという。



朝倉館復元模型主要部（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵）

(4) 静かに治まる国となった全盛期（孝景）

孝景の代になると越前国内での合戦はなく、近隣の国々（若狭・丹後・美濃・近江・京都）へと出兵し、その勢威を内外に示した。幕府内での地位は次の通り順次向上した。

● 永正十三年（一五一六）

白傘袋・並びに毛氈鞍轡を許される。

● 享禄二年（一五二九）

將軍の御供衆に加えられる。

● 天文四年（一五三五）

塗關を許される。

● 天文七年（一五三八）

將軍の御相伴衆に列する。



朝倉義景肖像（心月寺蔵）
重要文化財

当時、一乗谷を訪れた都の公家富小路資直は人通りの多いのに驚いたり、孝景館の泉殿での酒宴の座敷の荘厳が目もあやに風流であったと感心したりしている。そして、歌の中で都の景色も一乗谷の景色にはとても及ばないと詠んでいる。一乗谷の繁栄がうかがえる。

(5) 全盛期を継承しながら滅亡（義景）

孝景の子延景は將軍義隆（義輝）の一字を賜って義景と改め左衛門督に任ぜられ、その後四位下に叙位されるなど歴代当主の中で最格の待遇を受けた。

義景は坂井郡桑庄大窪ノ浜において盛大に犬追物を興行したり、一乗谷の阿波賀河原で曲水の宴を催し、人々の高い評価を受けた。

永禄八年（一五六五）、將軍義隆が暗殺されると弟の義秋（義昭）を若狭・敦賀を経て一乗谷に迎えた。盛大な歓迎の宴を度々開催し、最高の栄華の一時を楽しんだ。

その後、義昭は織田信長を頼り、永禄十一年（一五六八）、幕府を再興した。



姉川合戦図屏風（福井県立博物館蔵）

三内川の争いが、天正元年（一五七三）、刀禰坂の合戦で大敗し、大野に退却するも大野郡司朝倉景鏡に裏切られ自害して滅亡した。

戦国の乱世に瀕世を清める人物、いわゆる天下を統一する人物として「越前の朝倉義景・甲斐の武田信玄・尾張の織田信長」の三人が挙げられ（『多聞院日記』）、その筆頭が朝倉義景であった。一方、朝倉方の史料（『朝倉宗満日記』）の中にも「天下を取って御屋形様を在京させるための武略をいろいろ思案していた」とあり、朝倉方にも天下取りの考えのあったことが分かる。しかし、運つたなく滅亡した。広景入国から一三七年目、孝景が国主になってから一〇三年目のことであった。（つづく）

橋本左内 (上)

いち早く近代的な統一国家像を展望

文／三上一夫

筆者プロフィール



三上 一夫氏
Kazuo Mikami

1921年朝鮮京城府生まれ。京城帝国大学史学科卒業。福井県立大野高等学校長・福井県教育研究所長などを経て、現在福井工業大学名誉教授。1989年に福井県文化賞、2004年に福井新聞文化賞を受賞。主要著書に「公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析」、『横井小楠の新政社会像』、最近では『幕末維新と松平春嶽』など多数。

「ふるさと福井・人物シリーズ」第六弾として、全国的にも著名な越前大名松平春嶽の側近、橋本左内を取り上げました。幕末維新期の福井藩を中心とした歴史研究家三上一夫さんに「橋本左内―いち早く近代的な統一国家像を展望」と題して、本誌(上)、(中)、(下)に分けて執筆をお願いしました。

実利好みの生い立ち

「幕末の志士」といえば、青少年期のアンケート調査では、よく土佐の坂本龍馬、長州の高杉晋作、薩摩の西郷隆盛らが筆頭にあげられる。しかし彼らにまさるとも劣らない識見と行動力をもち、とりわけ当時の厳しい「外圧」に敏感に反応し、いち早く日本の近代的な統一国家像をしっかりと見通した点では、恐らく左内の右に出るものはないだろう。

左内は天保五年(一八三四年)三月十一日、越前国福井城下を貫流する足羽川の橋北、常盤町(現、福井市春山二丁目)で生まれた。父親は藩医外科医の橋本彦也長綱、母親は越前海岸の菰浦にある真宗大行寺住職の娘梅尾で、左内は同型七男二女の長男。父は伯耆・豊前などと号し、また中国の宋の慶元の王、岳飛を慕って景岳と名



橋本左内肖像(島田墨仙筆)

乗った。

実は藩の重臣中根雪江が著した左内の伝記「橋本左内事跡」によると、身体つきは、やせ形で身長もやっと五尺ほど、色は白く一見したところ女性タイプであるが、その心がまえば大豪傑のように堂々たるもので、また生い立ちから実利好みの点が目立つと評した

ほどで、左内のさわ立った人間像が如実にうかがわれる。なお次のような逸話もある。あるとき友人の手のけがの治療を求められ、左内はいきなり焼きこてをあてようとした。友人は驚きその理由を尋ねると、「火傷の治療は習っているので、生傷をいったん火傷になおし、そのうえで手当てをしたい」と答えたという。このように左内の考え方には明らかに実利的、合理的な側面が目立つわけである。

十五歳で「啓発録」

彼は幼い時からなかなかの秀才で、十歳で「三國志」を誦読するほどであった。さらに十五歳のとき、つまり嘉永元年(一八四八年)六月、彼の省内省録ともいえる「啓発録」を著した

のが注目をひく。

ちょうどその年の四月、福井藩では能登半島沖合の船倉島近くに「異国船」が現われる―との情報を入手した。おそらくロシアかイギリスの艦船だと考えられるが、藩では直ちに武具奉行に命じて、大筒(和式大砲)を、三國奏はじめ、越前海岸の要所に配置し、さらに藩兵を繰り出して沿岸の厳重な警備に当らせた。したがって左内が「啓発録」を書いたのも、日本近海にせまる外国勢力に対して、いち早く敏感に反応し、激しい危機意識にかられたものといえよう。

なにぶん左内の人生への心構えを書き残すことで、自分の生き方を明確なものにした。要は「稚心を去る」「気を振る」「志を立てる」「字に勉める」「交友を選ぶ」の五つの項目にまとめ、これらを実践する必要性を説いている。

なかでも「立志」の項目のなかで、「福井から江戸行きを志した人は、今晩は今庄、明晩は木ノ本(滋賀県)の宿場、というふうに進めば、足の悪いものでも必ず江戸に到達する。聖賢豪傑をめざす人もこれと同じで、しっかりと目的意識をもってその目標に



「啓発録」石碑除幕式（平成8年10月7日、福井市左内公園）

写真提供：元 足羽公民館長 田中健治氏

なかには夜遊びに出るものもいた。こうした仲間に加わったことのない左内が、ときどき夜間外出するようになった。それを知った洪庵は気づかずに、塾生のひとりに、ひそかに左内の後をつけた。すると左内は大坂の天満橋の下に行き、河原の乞食たちを診察し、病人がいると親切に治療していた。こうした「医は仁術なり」を身をもって実践する左内の人柄には、洪庵もいたく感服したという。

嘉永五年（一八五二年）

帰藩後、間もなく父長綱

鋭意努力せねばならない」と強調するのである。

かねて福井市内の中学校では、「立志式」を行うところが目立つが、その点、こんにちの「生きて働く」啓発録の効用をはつきりみてとることができ

蘭学を勉学

翌嘉永二年、大坂の蘭学者緒方洪庵の通々齋塾に入門して蘭方医学を学んだ。そこではついに、洪庵をして「彼は他日わが塾名を掲げん、池中の蛟竜である」とまで褒賞させるほどの英才ぶりを発揮した。

ところで次のような当時のエピソードがある。同塾が全国諸藩から集った秀才の寄り集りとはいっても、塾生の

明道館の刷新

が死去したので、家督をついで二十五名五人扶持の藩医になる。翌六年六月のペリー艦隊の浦賀来航には、左内としても真剣な危機意識に徹したとみえ、翌安政元年（一八五四年）江戸に出て、坪井信良・杉田成翁に入門、本格的な蘭学の勉学とともに「経世済民」の実学的な論議にも取り組んだ。

翌安政二年三月設立の藩校明道館を

経営した中心人物の鈴木主税が、翌三年死去したため、藩主春嶽や中根雪江らが検討したあげく、左内は同年七月、明道館調教師心得として蘭学掛に任ぜられた。さらに翌四年一月、明道館学監同様心得に就任、事実上の館長として藩校の整備、刷新に心血を注ぐ。

左内は同館の「建学の精神」とされる「学政一致」、つまり学問と政治の一体化を受け継ぎ、学問の実用性を十分生かさねばならないと強調する。当時彼が起草した法令・布告には「経済有用」とか「実益」という言葉がよく用いられる。明道館開設までの学問の在り方が、朱子学の伝統に立つて、



橋本左内の講義風景（福井市、福井神社給馬堂）

月、洋書習字所が新たに設けられる。この点、西欧諸国の学問、自然科学、兵学などが優れており、到底わが国の及ぶところではないと考えたからである。

習字所の学科は、算理科・分析科、製械科、應算測量科・天文科など「実用・技術の学」に限った。そして「万一洋学にかこつけて、新異を好んだり正理をいつわり、衆人をまとわすようなことがあれば、取り調べたうえ断固たる措置をとる」（「館務私記」）と戒めた。

このとき左内は、「仁義の道、忠孝の教えはわれより開き、器技の工、芸術の精は、彼より取り候様」（安政四年十月二十一日付、村田氏秀あての手紙）と主張する。つまり一言でいえば、「和魂洋才」の考えによるものといえる。

ちなみに戦前の県立福井中学校（現、福井高等学校）の講堂ステージの両側上方に春嶽と左内の肖像写真が掲げられていた。卒業式などの記念式典の際は、その写真の下に校旗の旗手（五年生）と銃剣を持つ護衛生（四年生）が直立したこと（昭和二十年卒、森下謙寛氏八千葉県柏市豊四季五九一—一〇二〇回想談）は、同校が藩校明道館の学統にかかわることを如実に物語るわけである。

とかく議論をもてあそぶ傾向が目立つのに対して、左内は古人の口まねをする「豊饒云々とも申すべき者」だと決める。こうして実学精神を尊ぶ「学政一致」の教育に、藩政改革の精神的な支柱を求めたのである。

さらに左内の建議により安政四年四

平成十九年度

風花随筆文学賞

最優秀賞へ一般の部に
岩切さん(福島県)

平成十九年度の「風花随筆文学賞」(同実行委員会主催、当財団特別協賛)の授賞式が三月八日福井新聞社・風の森ホールで行われました。

この文学賞は、福井市出身の芥川賞作家津村節子さんの随筆「風花の街から」にちなんだ名称を冠した賞で、平成九年度に創設、十四年度から実行委員会により運営されており今回は十一回目です。

応募作品の審査委員長を務められている津村節子さんから入賞者十七人が表彰されました。津村さんは、「どの作品も秀作で最優秀賞を選定するために随分迷いました。」と話されました。入賞作品一つひとつに講評されました。今年度は、国内外から一般の部二百七十六編、高校生の部二千六百八十九編、計三千九百六十五編の応募が寄せられ慎重な審査が行われました。最優秀賞、優秀賞の皆さんは、次のとおりです。(敬称略)

一般の部

▽最優秀賞・福井県知事賞 岩切寿美(福島県)「四十五年目の約束」▽優秀賞・福井新聞社賞 佐藤幸枝(宮城県)「浮いてこい」▽優秀賞・仁愛女子短期大学賞 印南房吉(神奈川県)「ガンバって」▽優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞 羽生たまき(福井県)「化石の涙」▽優秀賞 岡部かずみ(岡山県)「水の風景」▽優秀賞 浜詰涼子(福井県)「たまご焼き(記念日)」

高校生の部

▽最優秀賞・福井県教育委員会賞 藤田早紀(金津高校)「光、求めて」▽優秀賞・福井新聞社賞 牧野聡子(高志高校)「弟」▽優秀賞・仁愛女子短期大学賞 永坂佳穂里(武生商業高校)「消火器は家庭の絆を救う」▽優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞 東 秀樹(武生高校)「一年前の入学祝」▽優秀賞 梶田琴里(高志高校)「二度の春」▽優秀賞 佐野利恵(武生商業高校)「高台」

げんでんふれあい福井財団賞 受賞作品紹介

化石の涙



一般の部
優秀賞

羽生たまきさん
(福井県大野市)

つないでいた義父の手にギュッと力が入った。ふと見ると、対面のガラスに映し出された老いた顔には、一筋の涙が伝っている。嫁いで二十三年。初めて見る義父の涙だった。それは、ガラスの向こうに隠されているはるか遠い人類の

しゃれこつべに不思議と重なり、まるで化石が泣いているようにも見えた。化石を見つめる義父の、どこか果てない純色の瞳に、ただならぬ気配を感じながらも私は何も聞けず、ただそっと傍らで節高のこつこつ手を握り続けていた。「たまきちゃん、動いている博物館へ、いっぺん行ってみたいもんやなあ。」かねてからのリクエストに応え、この日は、義父の手を取り隣市にある恐竜博物館へ参りて来た。私は、現在ここで展示解説員をしている。老いてなお好奇心旺盛な義父は、私の拙い解説を御供に、斬新な建物や展示化石の豊富さに感嘆の声を上げながら、ガラスに張り付くようにして館内を隈なく覗き歩い

た。ところが、最終コーナーの人類誕生の展示化石を目にした途端、形相が険しく一変してしまつたのだ。「……結局、うらがこのホモ・サピエンスの成れの果てというわけか……。ほれにしても何と愚かな生き物よのお。」長い沈黙を破り、義父が私の手を静かに解きながら訥々と語り始めた。「戦地でああ、こんなふうになつたしゃれこつべをきようさん見たよ。隊長の命令で、敵兵の亡骸に小便かけてよく歩かされたもんや。仏さんに敵も味方もあるまいになあ。皆、心で手え合せて泣きながら屍を焼くも踏み越えてなあ。ひどいことしたもんや。ヒト以下の所業や。」囁きを必死にこらえながら、絞るように言の葉をつらねてゆく。これまで、子供達が宿題だからとどんなにせがんで、戦争について決して多くを語らぬ義父であった。博物館という独特な空間で、

生命の歴史を縫いていくうちに、心の奥底に震のように溜まっていた恐ろしい記憶が、再び色付いてしまつたに違いない。これまで生命は、子孫を残すというごくシンプルな共通課題のもと、進化と退化を繰り返しながら多様な種を産み出し、脈々と命をつないできた。それなのに、種々の命を受け継いで誕生したはずの我々人類は、賢い人、を意味するホモ・サピエンスを名乗りながらも、その賢さ故か、愚かな殺戮を今なお繰り返している。ガラス越しのしゃれこつべが、そんな義父の表情を丸呑みし、みるみる苦しみ、にやがんでいく。戦争で無残に散った人々や、命のリレーを繰り返しながらも絶えてしまったはるか遠い生き物や先人達の悲鳴が、義父には聞こえていたのかもしれない。目の前の物言わぬ化石が、私の涙を激しく揺る。

第11回 風花随筆文学賞 授賞式



作家 津村節子さん(前列中央)を囲み表彰記念撮影

一年前の入学祝



高校生の部
優秀賞

東 秀樹さん
(武生高校)

国に仕え、家族を守り、農業一筋に懸命に生きてきた義父。頑固一徹で骨太に見えたその人生の裏側で、こんなにも重たい十字架を人知れず背負って生きてきたのかと思つたままらなかつた。一体、これまで義父の何を見て来たのだろうか。この日、私は初めて義父に直に触れたような気がした。

あれから一年、義父も八十五歳になつた。最近では認知症が進み、何をやるにもおぼつかない。それでも、出勤する私を気遣い、杖をつきつき玄關まで見送ってくれる。

「行つてらっしゃい。早お帰つて来てのお。うちも、いっぺんでいいで博物館へ行つてみたいもんや。」

「そやね、今度お天気の良い日に行こうね。」

私の事が見えなくなるまで、窓から身を乗り出し手を振っている。無邪気な姿に、あふれそよになる涙を必死にこらえながらハンドルを握る。無情にも、新しい記憶から顔形もなくバラバラと割れ落ち、今はもう、博物館を訪れたことすら覚えていない。毎朝、幼児のように同じ会話を繰り返すだけである。

しかし、あの悲しい戦争の記憶だけは、今なお義父の内にしっかりととびこり、決して風化することはない。それが悲しい。

閉館間際の静まり返った博物館。時折、あのしゃれたつべの前に一人佇んでみる。

あれ以来、無表情にしか映らなかつた多くの化石達が、表情も豊かに色付いて見えるようになった。ガラス越しのしゃれたつべに、今はそんな私の笑顔がくつきりと映し出されている。

けれど、あの日の化石に宿った義父の哀しい涙を、私は決して忘れない。

ここに一枚の手紙がある。小さめの便箋に黒の万年筆で綴られたそれは、一字一字がとてつとてしつかりと書かれていた。これが百歳を超えて視力もわずかという人のものだと言つたら、おそらく誰もが驚くだろう。

入学おめでとう

一日一日つらい事もあるかと思いますが、これからの季節が一番いい気候ですから、体を大事にして頑張ってください。

この手紙が届けられたのは、去年の三月。本をかうようにとお金も添えられていた。一瞬私は戸惑った。なぜなら受験もしていない一年前に入学祝をいただいたしまったからだ。

「あらあ、ひいばあちゃんから早からお祝もてもて。こうなつたら絶対に合格せなあかんね。しつかり頑張つてや。」

母に言われるまでもなく、素直に私もそう思った。ただこれが祖母からの最後の手紙になることは、この時はまだ知るよしもなかつたのである。

今から思えば、祖母は自分の死期を悟っていたのかもしれない。昨年、全国各地で猛威を振るつたノロウイルス。彼女もその犠牲者の一人となつた。

明治、大正、昭和、平成と実に四つの時代を力強く生き抜き、祖父を含めて六人の子供を育てあげた。幼い頃、夏休み

に遊びに行くと、ここにこしながら出してくれたカルピス。水は無しで生温かく、超濃めのその味が懐かしい。

滋賀県に住む祖母に母は、私が生れてから事ある毎に写真を送りつけていた。学年が上がるにつれて、毎年はお会いしなかつた私に祖母は必ず決まってこう言つた。

「この間見せてもらった写真より、またえらいことこつこつなつて、ぼんは相撲取りにでもなるんか。どこの部屋行くんや。」

全く冗談のきついおばあさんだ。でもいつもおもしろいことを言つては、よく笑わせてくれたいなあ。泣くも笑うも同じ一生。どうせなら笑顔で私も祖母のようにかくありたいものだ。

ところで、私の高校受験はと言つと、自分で言つても恥ずかしいが、それは愛と感動の涙なくしてはどうも語れそうにない。

志望校決定に最も重要視されていた十一月の学力診断テスト。あろうことが、私はこれで過去最低の成績をとってしまった。立ち直れない私。併願の私立受験にも身が入らない始末。悔しかった。それ以上に思うように点が取れない自分が情けなかつた。そして私はいつの間にか周囲の人々全てに疎ましささえ覚えるようになっていたのだ。

さらに追い打ちをかけるが如く、事態はますます悪い方向へ進んでいった。祖母の死と祖父の心臓大手術である。昨年ほど暗く怖たらしい師走はなかつただろう。しかし、自分の進路よりも、家族の命の重要性についてしみじみ考えた時でもあつた。以前より元氣そうに花づくりに精を出している祖父。幸せ。

実を言つと、冒頭に記した祖母からこの手紙にはもう少し続きがある。そしてこの文面こそ、私を暗闇の底から救い出

してくれた言葉だと言つても過言ではないと思う。

ぼんは、家の宝です。

宝にふさわしい人間になってください。毎日仏さんにお願ひしますから。

短いけれど、心にぐっとくる言葉だつた。私は何かがふつ切れたような気がした。

年が明けてからの三ヶ月間。迷いは一切なくなつた。不思議と落ちついて強めた試験。合格できた。

決して楽ではない将来とわかつていながらぎりぎりの所で選択した中三の経験は、私にとっていくらかの強みになるだろう。

さて、久しぶりに手紙でも書いてみようか。

拝啓 ひいおばあさん

残暑厳しき折いかがお過ごしですか。私は夏休み中もほぼ毎日学校です。相模部はなかつたので、柔道部に入りま

した。気が優しい私は、格闘技には向いてないみたい。女の子でもス「イ子」いるよ。必死で入った高校。想像以上にきついわあ。おばあさんの言う宝にふさわしい人間でどんなの。自分の夢を決して諦めない人間。たつた一度の人生だから、思う存分悔いのないように生きたいな。

あのお、もう一人のひいばあちゃんについて。このところめっきり小さく

なつたみたい。でもお風呂に行くのは嬉しいようです。おばあさんと一緒に、かっぱえびせんが大好き。時々入れ歯を失い大捜しするけど、またどこからか手品のように出てくるからおもしろい。

おばあさんにしてあげられなかつた分こつちのおばあちゃんに優しくするね。どうしたわけか私の両目はだんだんぼやけて、やがて文字が見えなくなつた。

福井県指定無形民俗文化財

「花山行事」

福井市

「花山行事」奉納

鮮やかな新緑のもと五月五日（子供の日）に福井市板井町に伝わる福井県指定無形民俗文化財の「花山行事」が子供達の健やかな成長と五穀豊穡、火災鎮護を願い、同地区の告知神社に奉納されました。



若武者 勢ぞろい

福井市板井町は、旧足羽郡東郷村の田園地域にある旧集落五十六戸と新しい住宅団地二十八戸、計八十四戸の地区です。

当日は、「花山春まつり」として、午前中が「春季祭礼」、午後「花山行事」が奉納され、その後、境内で「花山権現太鼓」やゲームなどが行われ多くの区民の方々が親子で夕方まで楽しんでいました。

「花山行事」のあらまし

「花山行事」が行われる数日前に、子供達の親は香の花集めや青竹の植作りの準備をします。竹槍の先に葉を巻き、そこにツツジや藤などの花を差した「花山」と「花三度笠」を作ります。

毎年五月五日の端午の節句に集落の子供（一才から十五才まで、（実際は小学生まで）幼児は親に抱かれて加わります）が参加します。もともとは、男児だけの行事であったが子供の減少で平成十二年度から女兒の参加が認められました。

子供達は、法被、鉢巻の勇壮な姿で花山をかついで正午に神社境内に集まります。年長者三人が前役、中役、後役として行事を司ります。三役は、三度笠をかぶり太刀に似せた青竹の棒を



威勢よく告知神社を出発

腰に差し、指揮棒の竹と花山を持ちます。

この日集った三十九人の子供達は、一列横隊に整列し、最年長者が神

殿に向かって次のように拝礼の声を掛けます。

- 整列 ○ 花をおけ
- 整列 ○ はちまきをとれ
- 一同礼 ○ 東向け東
- 一同礼 ○ 正面を向け
- はちまきをしめろ ○ 花を持て
- 西向け西

拝礼の後、一列縦隊になり「はなやーま、こんげん」と唱和しながら神社本殿の周囲を三周し、神社から町内に向かいます。

町内を練り歩く

「花山権現太鼓」とともに、「花山権現」と元氣いっばいの掛け声で連呼しながら約一時間町内の道路を練り歩きま



成長願い元気に練る子供達

再び神社境内に戻り拝殿を一周し一列横隊に整列し、年長者が神殿に向かい拝礼の声を掛けます。

- 整列 ○ 花をおけ
- はちまきをとれ ○ 花をたけ
- 一同礼 ○ はちまきをしめろ
- 花をとれ ○ 花をたけ

めいめいの花山を神殿の敷石にたたきつけ、花を結っていた縄を境内の杉の木に投げ掛けて子供達が健やかに育っていくことを願っていました。



最後に「花山」を壊す

「花山行事」の由来

花山行事に関する記録は残されてなく、縁起は定かでないが七百年程前の源平の戦いを利することができなかつた平氏の武士の集団がこの地に住み着き、歴代武士であった思いや誇りを後世に伝え残すため「花山行事」を始めたと言われています。

「花山」とは、花に見せかけた槍になぞらえた青竹の飾りを総称するもので、最初は、正装した大人の武士の集団再現の行事であったと言われ、いつしか子供達の行事に変わり今に引き継がれています。

昭和三十七年五月十五日に福井県教育委員会から無形民俗文化財に指定されて以来、地区挙げて「花山行事」の保存、伝承に努めています。

花山行事保存会の奥真早信会長さんは、「後継者育成が大切です。主体である子供達にこの行事の意義をわかりやすく教え理解してもらうこと、行事に参加するための魅力を持たせる工夫が必要です。」と話されていました。



ろう かく さん すい ず
 楼閣山水図 一幅
 か の う えい がく
 狩野永岳 筆

□絹本着色 □縦 130.0 cm×横 57.8 cm
 □江戸後期 □落款 狩野縫殿助永岳
 □印章 「永岳」朱文橢円印

本図のような作品は青緑山水とも称されますが、これは山岳をはっきりとした輪郭線で描き、主に手前の山を緑青で、また遠山を群青で彩色する中国山水図の一形式のことを指します。山麓に輪郭線に沿って泥引（金泥線）を施すことも多く、峻険でありながらも美麗な山容の景が描かれます。

画中には、麓から続く一本の小道が岩肌を抜け、水際に沿いながら石梁へと続き、さらに連山の楼閣へと伸びています。小道を行く人や驢馬に騎乗する人物をはじめ水景に浮かぶ舟や水鳥などが諸処に配され、さながら文人の理想郷ともいえるべき、のどかな山水の景が広がっています。

いすれも険しい山々を中景と遠景に置く中国・北宋画の影響を受けたものですが、水汀にみる波線は直線を基本にしながら震えるように描かれ、岩壁や土坡も幾層にも重なり、岩肌や土壁も幾層にも重なり、まるで雲のように描かれています。その筆致は、京狩野の山雪の画を発想の源としており、しばしば「エキセントリック」と評される永岳画の特徴を表しています。

また永岳は当時流行していた諸派のあらゆる画風を積極的に取り入れて自家筆意の中のものとして入れています。本図も永岳の幅広い画風の摂取がうかがえます。

筆者の狩野永岳は寛政二年（一七九〇）京狩野家八代永俊の養子となり、永俊が没した後に第九代を継ぎました。初めの名は泰助、通称は縫殿助、字は公頼、また山梁、晩翠とも号しました。時の関白九条尚忠の家臣となりますが、家禄をもらいながら従来通り禁裏御用画師も勤めました。復古大和絵派の冷泉為恭の父に当たる永泰は永岳の弟なので、為恭とは伯父甥の關係に当たります。慶応三年（一八六七）七十八歳没。

福井の文学碑

国文学者 芳賀矢一

福井市出身の国文学者「芳賀矢一ゆかりの地」の石碑が福井市日之出三丁目、白山公園内に建てられています。石碑には

「芳賀矢一ゆかりの地」

明治大正時代に於ける我國語界の権威文学博士芳賀矢一ゆかりの地である。博士は慶應三年五月十四日福井藩の國学者芳賀真咲の長男に生まれ、この付近が幼少時の本籍地である」と記されています。



「芳賀矢一ゆかりの地」石碑
福井市日之出3丁目（白山公園内）

日本文献学の創始者

福井市出身の国文学者である芳賀矢一は、東京帝国大学教授として、國學院大學の初代学長として教育と国文学の向上に大きな業績をあげました。



国文学者 芳賀矢一

間は、小説や俳句など新しい文学の道に進んだ。

生いたち

矢一は、父真咲（本名真之助）と母和枝の長男として慶應三年（一八六七）福井市で生まれました。

明治六年（一八七三）四月、満六歳で川口小学校（今日の順化小学校の前で、現在の柴田神社の西側（中央一丁目（二番地）あたりに位置した）へ入学し、一年間通学しました。

明治七年春、芳賀家は福井を離れ父の転任先の新潟県高田へ移りその後、東京、仙台へと転居し、中学は仙台の宮城中学校で学びました。

明治十七年（一八八四）東京大学予備門（後の第一高等学校）に入学。明治二十二年（一八八九）帝国大学文科大学国文科に進みました。同大学では、尾崎紅葉、正岡子規、川上眉山、夏目漱石らが、既に創作活動を始めていた。

特に、国文学に文献学という西洋の血を入れた近代的な学問に発展させた「日本文献学」、「説話文学」および「日本国民性」の研究などに力を注ぎました。

国学の基礎づくり

明治三十三年（一九〇〇）東京帝国大学助教授として教鞭をとっていました。国文学研究の方法をドイツの文献学に求めるため家族と別れてドイツに留学しました。明治三十三年十一月に「国文学史概論」を刊行し、国文学とはどのような学問であるかという問い、国文学の歴史を述べています。

この中で「西洋の学者は、文献をもとにしてその国を研究している。日本では、国語国文をもとにして研究するのである。過去二百年間の国学者（諸先輩）の研究を基として、その上に新研究を添えねばならない」と結んでいます。

ドイツでの研究を終え明治三十五年（一九〇二）帰国し、東京帝国大学文科大学教授となり、講義で、日本文献学とは国文学のことと定義し、その研究分野を（一）言語（二）文学（三）律令（古代の法令）制度（四）有職（古代の礼式）（五）神道とし、日本文献学も一つの独立した学問でなく、多くの学問を総合し日本民族固有の文化や精神を究めようとする学問であると解いています。

でいくが芳賀は国文学という地道な研究を選びました。



白筆家系書
本籍地は日之出中町とある

国定教科書や文部省唱歌も

明治四十年、日本民族の文化や精神について考察した「国民性十論」を、明治四十二年随筆「月雪花」、明治四十五年「日本人」、大正五年「戦争と国民性」を出版しています。また、国定教科書の編さんに力を注いだほか、小学唱歌の編さん委員長を務め、「鎌倉」、「近江八景」など文部省唱歌の作詞にも才能が発揮されています。

郷土を愛する心深く

大正七年（一九一八）から昭和二年（一九二七）に五十九歳で死去されるまで國學院大學の初代学長として務めた芳賀は、福井で暮らしたのはわずか七年間だったが、明治三十一年（一八九八）同郷の今立裕、大久保介寿らと福井藩出身者の集まりで後に東京県人会となる「福井会」を作りました。そして「郷土を愛せよ、郷土愛は、わが家を思いわが国を思う根本なり」と常々話し、終生福井を唯一の郷里として大切にしたい続けました。

交通案内



青少年育成福井県民会議発行の「若緑山脈（第五集）」を参考にさせていただきました。

第27回 全国地名研究者大会

～若狭を中心とした日本海の交流～



谷川健一所長の「基調講演」

第27回 全国地名研究者大会 開催

～若狭を中心とした日本海の交流～

「若狭を中心とした日本海の交流」をテーマに第27回全国地名研究者大会が五月二十四日、全国各地からの研究者約二百名と県内からの参加者約二百名が出席し小浜市文化会館で盛大に開催されました。

まず、民俗学者の谷川健一日本地名研究所所長が、「若狭八百比丘尼伝説の誕生」と題して基調講演し、江戸時代の郷土史家木崎愷憲（正敏）の著「拾遺雑話」を民俗学者柳田國男からもらったことを披露し、この本に載っている「人魚話」に勢村（現小浜市）にいた高橋長者という富豪の娘がこっそり人魚を食べてしまい数百年過ぎてても年をとることがなかった。とあり、八百比丘尼とはその娘のことだ。

高橋長者は、若狭の漁民に縁の深かった、(朝廷の食糧に奉仕し、御食国を管理する) 膳臣で、のちの高橋朝臣が一族のあいだに伝えた伝承であることと推測すると説きました。次いで、地元講演では、金田久璋若狭路文化研究会会長が「若狭の語源をめぐって」、語源説は日本書紀に基づく「稚岐」説他二十九説あると説明。若狭以外に沖繩県から北海道まで二十一の「若狭」地名を示し、中でも青森県十和田市深持字若狭に注目し、「戸数九戸の集落、せまい地域にあり、アイヌの末裔と言う人もいる。水の多いところを意味するアイヌ語「WAKKAISA」説を検討する価値があるのではないか」と発表しました。



壬生狂言「花盗人」熱演

また、小浜市世界遺産推進室の杉本泰俊調査役は、「小浜湊と海運」について、小浜には平安時代に創建された重要文化財で明通寺の三重の塔、羽賀寺、妙楽寺、神宮寺の本堂や国指定の彫刻などが多く残されており、当時の仏教文化の繁栄ぶりが伺える。大陸との交易による繁栄のもとで残されてきたと報告しました。また「報告」では、日本民俗学会会員の藤江久志氏は、「八百比丘尼のあるいた道」を、敦賀短期大学の多仁照廣教授は、「名子地名について」を、若狭地名研



「パネル討論」活発に

究会の永江秀雄会長は、「鯖街道の歴史、民俗、地名」についてを、日本漢学学会会長の石井忠氏は、「対馬海流の流れにのってー雄略海人たちの移動ー」についてそれぞれ研究の内容を報告されました。次に「パネル討論」では、敦賀短期大学の外園慎一郎教授の司会で谷川健一氏をはじめ七名のパネラーが報告したことについて活発に議論があり、会場の皆さんは、諸説を興味津々に聞き入っていました。その後「地名研究賞」と「日本地名を詠む」短歌コンクール入賞者の表彰式が行われました。

地名は、「大地に刻まれた人間の過去の索引」(谷川健一氏)と云う。その地に暮らした先人達の蓄積である地名文化の重要性を再確認するうえで大変盛り上がった全国大会でした。ふるさとの文化の保存や継承に取り組んでいる当財団は、この大会に特別協賛させていただきました。

若狭路の民話



この「若狭路の民話」は、岡山就実大学の田中文雅教授の編集で、現地での聞き取り調査を行い、分類整理した約千五百話から選り抜いた二百話を納めていきます。

その内容は、
昔話編 一、動物昔話 25話
二、本格昔話 40話
三、笑話 59話
伝説編 一、文化叙事伝説 32話
二、自然説明伝説 19話
世間話編 25話

就任ご挨拶

(財)ぐんでんふれあい福井財団

理事長 河島 進



第三十一回理事会(六月四日開催)で推挙され七月一日から当財団の理事長に就任しました。

当財団が発足して平成十九年十二月に十年を迎えました。おかげさまで皆様方の温かいご協力とご支援によりまして福井県の文化の振興をはじめ、ふれあいとゆとりある地域づくりに微力ながらお手伝いできる財団として定着してまいりました。

昨今の福井県内の文化振興ならびに活動状況は、平成十七年に福井県で開催された「第二十回国民文化祭」を契機に新しい文化環境が着々と整えられつつあります。この様な状況を踏まえ、今後とも県、市町や文化団体の皆様と連携を密にして、さらなる文化の振興のための基盤づくりやふれあいの活動に努力してまいりたいと考えています。

私は、福井(敦賀)に住んで約二十二年になり、また当財団の理事として二ヶ年間務めさせて頂いたできました。福井県を愛する一人として、福井にふさわしい財団とするために、県民の皆様からなお一層親しまれ信頼される財団運営を行ってまいりますので、ご指導とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成 20 年度 財団助成事業決まる

文化団体など 108 団体に 2,005 万円を交付

福井県内の文化振興を図るために、文化団体等の事業活動に支援する平成二十年年度の助成事業は、四月二十日に公募申請を締め切り、四月一日と五月十五日の二回に分けて助成事業選考委員会を開催し、慎重に審査を行いました。その結果の答申を受けて、一〇八の団体に對し、二、〇〇五万円の助成交付金を決定しました。

平成 20 年度 財団助成事業交付金一覧

事業大別	助成対象事業	団体数	助成交付金 (千円)
地域文化の振興事業	郷土の歴史・文化の保存伝承事業	16	2,720
	市民文化団体等の活動事業	39	5,810
	国際文化交流事業	5	700
	文化のまちづくり事業	14	2,450
ふれあい及びゆとりの創造事業	ボランティア団体等活動事業	9	870
	各種文化サークル活動事業	6	600
	環境保全等地域づくり事業	2	350
芸術鑑賞機会の提供及び文化創造事業	優れた芸術公演展示開催事業	3	850
	市民参加型芸術文化活動事業	12	3,450
	新人芸術家育成事業	1	250
福井県高等学校総合文化祭育成事業		1	2,000
合 計		108	20,050

若手ピアニスト 大谷研人さんに

有望な新人芸術家を育成するための特別奨励金



河島財団理事長から通知書を受ける大谷さん

大谷さんは、五歳でピアノを始め八歳で国内で最大のコンクール「ピティナ・ピアノコンペティション」で金賞を受賞。二〇〇二年にベルリン市立の音楽学校に入学し、二〇〇四年以降はハンガリーのリスト音楽学院に留学中です。同音楽院

福井県出身で将来有望な新人芸術家を育成するための当財団「特別奨励金支給制度」の対象者として六月四日開催した理事会で福井市出身の大谷研人さん(十七歳)が選ばれました。

ピアノ科のジュルジ・ナードル主任教授から「技術的また音楽的にも優れた才能を持ち合わせており、その豊かな感性と表現力は他に類をみない演奏者です」と推薦状が寄せられています。今年四月にイタリアで開かれた「パレタ青少年国際音楽コンクール」のピアノ部門で一位に輝きました。七月十日、当財団で河島理事長から特別奨励金支給通知書を送りました。

この支援制度の三人目の対象者となった大谷研人さんは、「財団奨励金支給制度に選ばれ、大変うれしいです。留学中はコンクールに参加するなど多くの経験を積んで帰国後は、福井の皆さんのお役に立ちたいと思います。」と話されました。



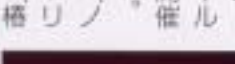
ピアノ演奏する大谷さん

Opera ハイライト 熱演

世界の林鹿子さんとテノール吉田浩之さん 他

世界のトップ・プリマドンナとして活躍している林麗子さんと日本を代表する敦賀市出身でテノール歌手の吉田浩之さん他がオペラの魅力を伝える「Opera ハイライト」(福井県文化振興事業団主催、当財団協賛)が六月十三日、ハーモニーホールふくいで開催されました。

演目は、フルマ・ベッリ二作曲、「橋



『蝶々夫人』を熱唱する
林康子さんと吉田浩之さん

曲、「蝶々夫人」ブ
曲を演じました。特
、林康子さんと若
カートン役の吉田
さん登場のアリア
カートンの愛の二重
唱「魅力に満ちた
瞳の赤ちゃんー」
③蝶々夫人のアリ
ア「ある晴れた日
に」④蝶々夫人と
ススキの二重唱な
ど本格的オペラの
名場面を次々と演
じ、約五百五十人
の観客は魅了し最
高潮に達していま
し。

文化講演会「まだまだ輝きたい、人生これから」

辻イト子さん熱く語る

敦賀市連合婦人会
と当財団の共催で四月
十三日、敦賀市プラザ
萬象においてタレント
で漫才師の辻イト子さ
んを招き、「まだまだ
輝きたい、人生これか
ら」と題して文化講演
会を開きました。

辻さんは、大阪府岸
和田市在住でみかん農
園とプロダクションを
経営している異色のタ
レントで幅広く活躍され
ています。農家の主婦とし
て障害のある子供を育てるな
ど苦難をのり越えタレント
として活躍している今日ま



「人生を大いに楽しみましょう」とはイト子さん

でを、自らの体験をもとにテンボが早く明るさとユーモアたっぷり話されました。「一つ違った自分を見つけて人生を太い楽しんでほしい」と会場約二百人の方にエールを送り、お客さんは興味深く聞き入っていました。

また、吉本興業に所属しており同行のご主人との息の合った漫才を披露しました。



「人生を大いに楽しみましょう」と辻イト子さん

読者アンケートのまとめ

「げんでんふれあい福井（第29号）について

財団広報誌第29号(平成19年11月発行)のアンケートに、
回答をいただきありがとうございました。

第29号で良かった記事

- おかげさまで財団設立 10 周年 11 名
ばんでんふれあい福井財団の役割と活動 (中)
- 2007 ふくい県民総合文化祭開催 7 名
- 継体天皇即位 1500 年「延暦21年の尊体天皇」 8 名
- ふるさと福井人物シリーズ「若狭の妙玄寺義門(上)」 10 名
- ふくいの伝統行事シリーズ「大火勢」 14 名
- 福井の文学界「作曲家 今川節」 13 名

本誌へのご意見、ご要望

- 表紙の大火勢が迫力がありとてもよかった。
- 財団の役割と活動の記事、歴史がわかり大変参考になりました。
- 財団の果されている活動の成果に感動しました。県内の文化活動の団体は財団の力添えにより活動ができていると思う。
- 長期の県内の文化活動についての連載があるとよいのでは。
- 各地域や芸能、文化が手にとるようにわかりやすくうまく表現できていました。
- 作曲家・今川節氏を初めて知りました。
- 福井県に住んでいても、若狭の方へは行く機会が少ない、ふくいの伝統行事は興味深いページでした。
- 各シリーズを単行本にして、関係機関へ配布してください。
- 字の大きさをもう少し大きくして下さい。
- 印刷が良いので、博物館ギャラリーなどはよく解る。

これからも誌面の充実に努めてまいりますので、今後ともご支援を
賜りますようお願いいたします。(編集係)

げんでんふれあいコンサート2008

～オズの魔法使い～

当財団主催の子供向けミュージカル「オズの魔法使い」(日本電通協賛)を六月二十九日(日)に敦賀市民文化センターで開催しました。

このミュージカルは、ニューヨーク、ブロードウェイで三十五年間ロングランを続けている名作で、今回は劇団カッパ座を招き公演しました。

物語は、主人公ドロシーが竜巻で家もろともオズの国に飛ばされ、家に帰りたいため、願いを叶えてくれるというエメラルドの都の大王に会いに行くことに



ドロシーとぬいぐるみ人形の仲間達

なりました。都への途中魔女に出会いま
すが物ごとを解決していきます。

子供達に、相手のことを認め合い、
自分に自信を持ち、一生懸命生きる
ことの大切さを感じていただくスト
ーリーで、わかりやすいミュージカル
を会場の約五百五十人の親子の皆さん
は、十分楽しんでいました。

第11回 2008

ふるさと大賞

写真コンテスト



第10回ふるさと大賞作品「あんたが大将」高山重隆氏(鯖江市)

賞金

ふるさと大賞	1点	賞状・トロフィー・賞金30万円 (※但し、高校生の場合は、賞金制奨励の記念品とする。)
ふるさと賞	3点	賞状・トロフィー・賞金 学生:5万円1点/一般:10万円2点
優秀賞	5点	賞状・トロフィー・賞金 学生:3万円2点/一般:5万円3点
入選	30点	記念品 学生:記念品5点/一般:記念品25点
佳作	30点	記念品 学生:記念品5点/一般:記念品25点

主催: (財)げんでんふれあい福井財団

後援: 福井県/福井県教育委員会/敦賀市/敦賀市教育委員会/(社)福井県文化協議会/福井県高等学校文化連盟/(株)福井新聞社
福井放送(株)/福井テレビジョン放送(株)/(株)南信ケーブルネットワーク
協賛: 福井県カメラ商組合/富士写真フイルム(株)/フジカラー北陸(株)

募集要項

- テーマ 「ふるさとふくいの輝き」
- 部門 学生の部(高校生以上)、一般の部、の2部門
- 資格 ①福井県に在住又は、学校・勤務先が福井県内であること。
②写真の専門家(プロカメラマン)でないこと。
- 作品 応募点数は制限しません。ただし応募者本人が県内で2006~2008年に撮影したもので、自作の未発表作品に限ります。
- 作品の規格 カラー・モノクロで、四ッ切、又は四ッ切Wの単写真のみとします。(デジタルプリントも同様)
- 応募方法 所定の専用応募用紙に必要事項を記入し作品の裏に、セロテープで貼って提出してください。
- 締切 平成20年12月8日(月) 当日消印有効
- 発表 平成21年1月下旬
※入賞者にはご通知いたします。
- 表彰 表彰式 (優秀賞以上)
平成21年2月7日(土) (ふるさとの日)
- 展示会 敦賀、福井市の2会場にて写真展を開催し、作品を広く県民の皆さんに公開します。
- その他 ①デジタルカメラの作品は合成や特殊加工がないもののみ可とします。
②入賞者には、ネガ・リバーサル等原板(デジタルカメラの場合は未処理データ【原画】をCDなどにコピーしたもの)の提出を求めます。
③応募作品は返却しません。但し、返却を希望される方は「返却希望」と封筒に朱書きし、500円切手を同封してください。
④入賞、入選作品の使用・著作権は主催者に帰属し、財団のPR活動等に使用させていただきます。
- 応募先 ①914-0051 福井県敦賀市本町2丁目9番16号 (財)げんでんふれあい福井財団
②福井県カメラ商組合及び県内フジカラー取扱店

財団イベント INFORMATION

げんでんふれあいスペシャル2008	米村でんじろう 他	8/21 (木)	福井市文化会館	財団主催 1,000円(全席指定)
ビートフェニックス	加藤ミリヤ、中孝介、HOME MADE 家族 他	8/22 (金)	福井市エルバ屋上駐車場特設ステージ	FM福井主催、財団協賛(前売り)4,800円
「SHOWTA」ライブ	SHOWTA 及び県内アマチュアバンドグループ	9/7 (日)	響のホール	福井テレビ主催、財団協賛(前売り)2,000円
第12回福祉演芸会	ゼンジー 一億(マジシャン) 林田麻友子(歌手)	10/7 (火) ~ 9 (木)	県内6福祉施設	財団主催、無料
能・狂言を楽しむ会	味方 玄 他	11/18 (火)	敦賀市プラザ萬象、能楽堂	財団主催、無料